



堀川ゼミ 募集要項 2026

Seminar Prospectus

**Horikawa
Seminar**

Dept. of Sociology
Hosei University

“ Say it with data (裏付けをもって語ろう) ——
堀川ゼミの精神はこの一言に見事に表現されていま
す。それは「現場を歩き、足で考える」ということです。 ”



私達の目指すもの

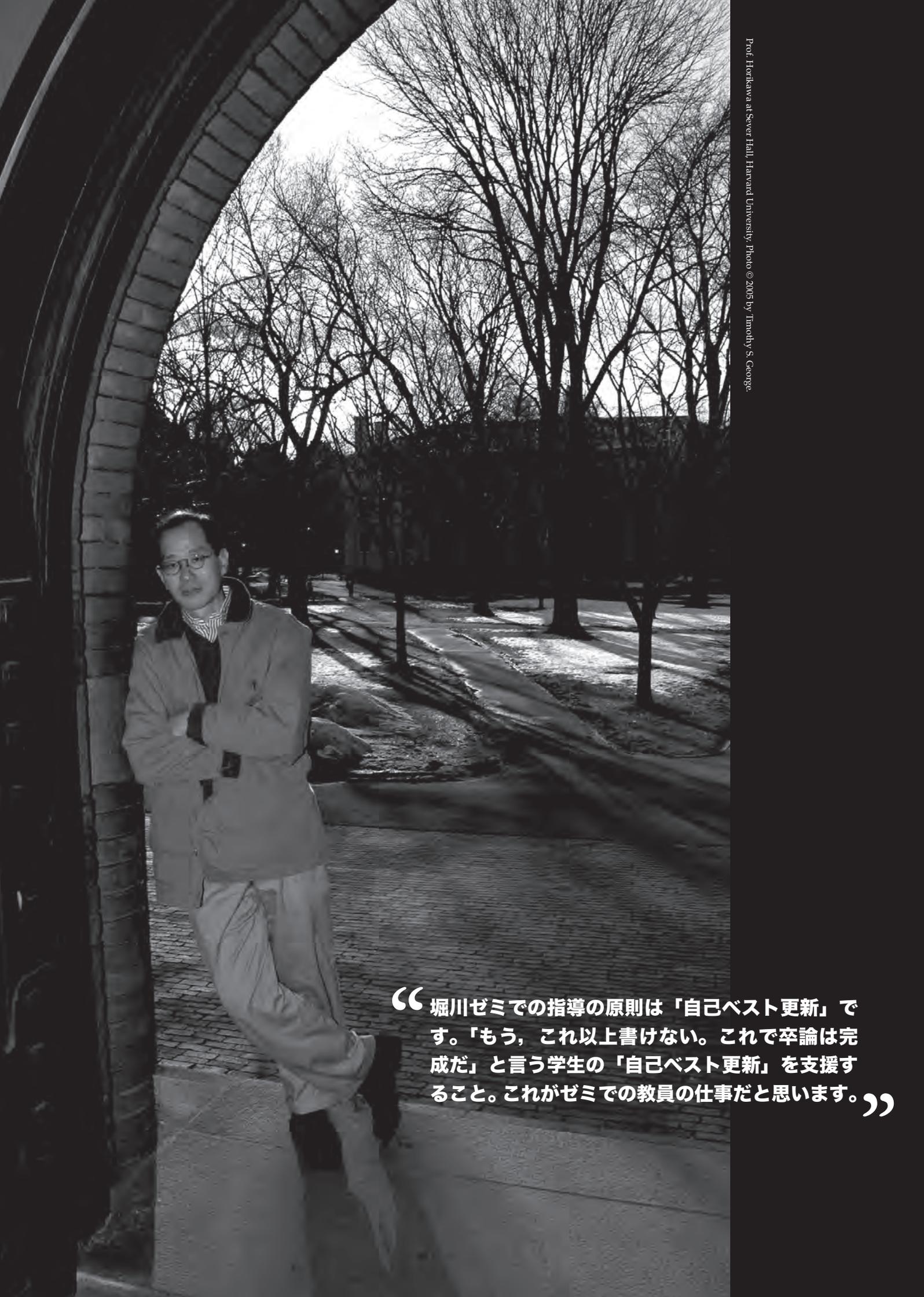
堀川ゼミへの招待

“Say it with data.”（裏付けをもって語ろう）——堀川ゼミの目指すものはこの一言に的確に表現されています。それは「現場を歩き、足で考える」ということです。他人の意見の受け売りやテレビで見聞きしたことをなぞるだけでなく、自らの足と頭、眼を使って考えに考え抜き、自分の言葉を紡ぎだすことこそ、私達、堀川ゼミの目指すものです。

そのために、私達は何を学ぶのでしょうか。端的に言えばそれは「方法」です。試験範囲の英文を暗記しただけの人は、範囲外の英文を一人で読み解くことはできません。範囲内の「正解」を知っているだけで、読む「方法」を知らないからです。しかし、英文法と辞書の使い方を知っていれば、一人で未知の英文も（すらすらとはいかなくとも）読み解いてゆくことができます。初見の英文であっても動じることはありません。なぜなら、「方法」を知っているから。堀川ゼミでは、具体的な社会問題を研究する過程で、社会を見る「方法」を学ぶことを目指します。卒業しても古びないもの、それは「知識」ではなく「方法」です。

実際にゼミ生は、各自の選んだテーマで卒業論文を執筆し、高度な知識のみならずこの「方法」をも身に付けてゆきます。その際、堀川ゼミでの卒論指導の原則は「自己ベスト更新への挑戦を支援する」です。「もう、これ以上は無理だ。これで卒論は完成ということにしよう」と早上がりしがちな学生に「待った」をかけ、限界と思った地点を超えてもうひとがんばりさせること——そんな「自己ベスト更新」を支援することが、ゼミでの教員の仕事だと考えています。

自らの限界を自分で打ち破って、想像もできなかった広い視野がパッと開けた瞬間、きっと君は気がつくはずです。あきらめずに走りきった者だけに許される「勝利の美酒」が本当にあるということ。この一文は、その美酒への招待状に他なりません。



“堀川ゼミでの指導の原則は「自己ベスト更新」です。「もう、これ以上書けない。これで卒論は完成だ」と言う学生の「自己ベスト更新」を支援すること。これがゼミでの教員の仕事だと思います。”

2026年度（第24期生） 募集要領

■ 堀川ゼミの概要——応募前に知っておきたい事柄

通常のゼミは、おおよそ下記のように運営されます。今年度の履修者との相談で決まる部分もありますが、基本線は同じです。

開講時間 演習 [1] 月 5 限（於ゼミ室；）です。

ゼミの基本テーマ 基本的には都市問題か環境問題に興味のある学生を対象とします。キーワードでいえば、「社会学, 都市問題, 環境問題, 歴史的環境, 公害, 社会調査, フィールドワーク」といったところとなるでしょう。具体例でいえば, 都市問題系では「都市社会学, 都市計画, 再開発, 景観問題, 町並み保存, まちづくり, アメニティ, 都市空間, 住宅問題」など, 環境問題系ならば「環境社会学, 公害問題, 足尾銅山鉍毒事件, 水俣病事件, 公害汚染地域の再生, 環境保護運動, リサイクル運動」などです。

※ 担当教員・堀川は2026年度の一年間, 研究専念期間（サバティカル期間）を取得することになりました。したがって, 2026.4～2027.3は代講の教員が指導にあたります。堀川が信頼・尊敬する竹村英樹先生（慶應義塾大学）に代講をお願いすることになっています。堀川は2027年度から復帰しますので, 24期生の3～4年次は堀川が指導します。2026年度も数回は, 堀川が竹村先生と一緒に指導しますので, 連続性に問題はありませぬ。以上を予めご了承の上, ご応募ください。

指導内容 基本的には, 下記の3分野において指導がなされます:

- (1) 研究に必要な技術の学習（パソコン, データベース, ノートテイキング等）
- (2) 基礎的な文献の読破（精読と多読, 英語文献への挑戦）
- (3) ゼミ論文の執筆（年度の終わりの修了論文〔ゼミ論〕と卒業論文〔卒論〕）

演習（ゼミ）の進め方 課題文献を全員が熟読してきたうえで、レポーター1名が内容を簡潔に要約します。内容を過不足無く理解し、重要な論点を端的に指摘します。それを受けてコメンテーター1名が文献の持つ可能性や限界、問題点や疑問点、批判点をあげて議論の口火を切ります。その後は教員も交えて縦横無尽に議論する——これが毎週の演習の進め方です（後期からはスケッチャー1名が当日の議論内容の概要をまとめてプリントにして翌週に配付、議論の中身を再確認します）。通常、17:20に開始して、19:10ごろまで行います。

サブゼミ 正規の演習（本ゼミ）とは別に、ゼミ生による「サブゼミ」も、堀川ゼミの活動の重要な柱のひとつです。サブゼミは、教員抜きのゼミです。ここで議論の続きをしたり、お互いの素朴な疑問を出しあったり、あるいはゼミ文献の予習を一緒にやったり。サブゼミ運営の仕方は、学生同士で話し合って決定します。年度によっては、T.A. (Teaching Assistant) の大学院生が相談役として参加してくれる場合もあります。

演習のモットー 堀川演習のモットーは“Say it with data.”（「裏付けのある主張をしよう」「データで語ろう」）です。これはアメリカの著名な統計入門書の書名 *Say it with Figures*（邦訳『数字で語る』）に由来しています。データと言い換えてあるのは、インタビューなどの質的データを積極的に採用しているゼミだからです。いずれにせよ、机上の空論ではなく、地に足をつけた議論を目指している、という意味です。

演習の年次予定 下記の年間計画によって運営されます：

【Iゼミ】	前期	社会学の基礎文献の講読
	夏休	ゼミ合宿
	後期	古典講読 -1・各自のゼミ論構想発表
【IIゼミ】	前期	古典講読 -2・短い英語論文の翻訳
	夏休	ゼミ合宿
	後期	文献講読・各自のゼミ論構想発表
【IIIゼミ】	前期	各自の卒論研究・フィールドワーク
	夏休	ゼミ合宿
	後期	卒論構想案にもとづく集中討議
	1月中旬	卒論提出（4年生）
	1月下旬	ゼミ修了論文提出（2-3年生）

演習の行事 下記のように行事はそう多くはありませんが、基本線は「メリハリのあるゼミ生活」です：

- ・新歓食事会（4月中旬から下旬にかけて）
- ・ゼミ BBQ パーティー（5月）
- ・サブゼミ（週一回）
- ・OB/OG と語る会（就職相談会を兼ねています）
- ・夏合宿（2泊3日）
- ・卒論公開口頭試問
- ・“The Dinner”（公開審査の直後；皆でお洒落をしてフレンチ・レストランで本式のディナーを食べて語ります）

■ 卒業生の進路

1997 年度に始まった堀川ゼミでは、現在までに 21 期のゼミ生が多摩キャンパスを巣立っていきました（22 期生が 4 年次に在籍中）。主な進路を列挙すれば以下ようになります：

- ・ NEC ネクサソリューションズ
- ・ (株) スズケン
- ・ (株) 東急コミュニティー
- ・ 中央労災防止協会
- ・ UR 都市機構
- ・ 自営農
- ・ 東京都住宅供給公社
- ・ 日本ハウジング
- ・ (株) システックス
- ・ 丸の内ホテル
- ・ 日本事務器株式会社
- ・ 四谷学院
- ・ Starbucks, Inc.
- ・ 凸版印刷 (株)
- ・ 全日空システム企画 (株)
- ・ (株) 丸善
- ・ (株) 大京アステージ
- ・ Google, Inc.
- ・ 相模原市役所
- ・ 学校法人 関東学院
- ・ 泉総合法律事務所
- ・ みずほ東芝リース
- ・ 大建工業デザイン研究所
- ・ デーリー東北 (記者)
- ・ Nexco 東日本
- ・ 学校法人 長野大学
- ・ (株) リアライブ
- ・ 共立株式会社
- ・ NHK (記者職)
- ・ 宮城県庁
- ・ 市原市役所
- ・ 都労働基準監督署
- ・ 東京都庁
- ・ 横浜市役所
- ・ 鎌倉市役所
- ・ (株) ワタル
- ・ 読売新聞 (記者)
- ・ 神奈川新聞 (記者)
- ・ かんぼ生命
- ・ ANA あきんど
- ・ 法政大学大学院社会学研究科修士課程
- ・ 立教大学社会学部教授 (環境社会学, 経済社会学担当)
- ・ 京都女子大学准教授 (地域社会学, 環境社会学, 都市政策論担当)



Photos by: * Saburo Horikawa + Satoshi Morihisa (00) # Saoko Kusumaki (12) + Hajime Kimura (Obirin University)

- ・上智大学大学院総合人間科学研究科博士課程（社会学専攻）
- ・オクラホマ州立大学大学院修士課程（環境社会学専攻）
- ・早稲田大学大学院人間科学研究科修士課程（地域・地球環境科学研究領域）
- ・University of Stirling Graduate School など

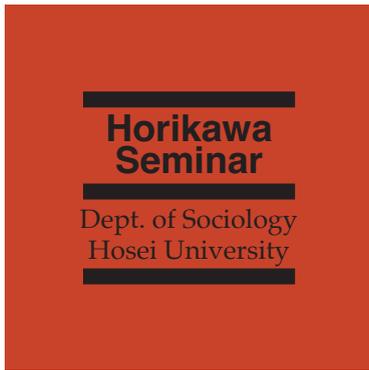
■ 演習の「売り」

- (1) 論文の個別指導を受けることができます。
- (2) フィールドワークをもとにして論文／ルポルタージュ／新聞記事を書いてみたいと思っている人に対して具体的なアドバイスをすることができます。
- (3) 関連する学問領域が複数にわたるため、受講者の今後の学習、とりわけ卒論に参考になる事項が学べます。
- (4) 大学生として必要な基礎技術がキチッと学習できます。
- (5) 程よい規模のゼミで、仲間のサポート・叱咤激励のなかで勉強をすすめることができ、良い人間関係が構築可能です。
- (6) サブゼミや合宿の企画・運営は、大幅に学生に任されていますので、自分たちの希望を反映させることが可能です。
- (7) 過去8名が大学院に進学（うち学会賞受賞5回）したことが示すように、楽しい中にも高いレベルの議論が可能です。また、院入試対策への助言が得られます。
- (8) 卒論口頭試問の後、八王子の小さなフレンチ・レストランを借り切って行う卒業の宴（“The Dinner”）は、卒業生が繰り返し語るほど、心に残る素敵な行事です。

■ 2026 年度選考要領

- 募集人数** 最大15名程度（演習 [1]）
- ゼミ説明会** 3月26日 [木] 10:00～11:00; 304 教室
- ゼミ選考面接** 3月30日 [月] 13:00～ 716 教室（控室 715）

選考方法 入ゼミ希望者は3月29日 [日] 20:59 までに担当教員のメールアドレス (sab@hosei.ac.jp) 宛てに「入ゼミレポート」を提出してください。各自の興味関心、テーマ、自己紹介などを記した「入ゼミレポート」(A4判で2～4頁程度)と「面接」(15～30分)の結果をもとに選考し、後日、結果を2階事務課前のゼミ掲示板に掲示します。必ず、このゼミ募集要項パンフの各所を熟読のうえ、応募してください。



堀川ゼミの公式ロゴ (デザイン=堀川三郎)

応募者への希望 受講条件として、下記の5点を学生諸君に求めたいと思います：

- (1) 正規の時間以外に週1回実施するサブゼミに参加すること
- (2) きちんと毎回出席し、熱意をもって課題等を実行すること
- (3) 課題以外にも自分で主体的に文献を探して読んでくること
- (4) 自分にとって揺るがせにできない疑問を考えてみたいと思っていること
- (5) 「教員から教えてもらう」態度ではなく、自分から積極的に学ぼうとすること

ゼミ公式サイト <https://horikawa-seminar.ws.hosei.ac.jp/>

■ 担当教員・堀川三郎のプロフィール



Photo courtesy of Maly at Missouri Historical Society, 2023.

セントルイスの文書館にて史料を複写中 (2023)

・“Say it with data.”をモットーに、学生のころから一人で「現場」を歩き、自分の目と足で調査することを続けてきました。1984年早春、北海道小樽市で小樽運河の保存問題に触れて以来、現在も調査を継続中。古い町並み（歴史的環境）を残すことは「好事家の手慰み」ではなく、人間と環境との関係について何か大切なことを語りかけているのではないか—この問題意識が私の研究の原点です。その小樽を基準点として、他の町並み保存の現場（近江八幡、妻籠、伊根、川越、鞆の浦、Boston, Cambridge, New York, Tampa, St. Louis, Charlottesville, Williamsburg, Charleston, Savannah, Chicago, Washington, D.C., Venezia, Norwich, Paris, 南京, 蘇州, ソウルなど）や公害被害地（水俣や足尾, Love Canal [NY] など）を歩き回るうちに、研究することの楽しさや難しさといったものが少し見えてきたように思います。ゼミではそれを伝えられたらと思っています。

・（「著者略歴」風に書けば）1997年に法政に着任、現在、法政大学社会学部教授。慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程修了、博士（社会学）。専門は環境社会学、都市社会学、日米比較社会論。「環境社会学」「社会調査実習」「外書講読〔社会学〕」などを担当。東京大学客員助教授、ハーヴァード大学ライシャワー研究所客員研究員、慶應義塾大学大学院訪問教授、『環境と公害』編集同人、南京大学社会学院客員教授、国際社会学会理事（RC24, ISA）、環境社会学会会長等を歴任。現在、ハーヴァード大学ライシャワー研究所連携研究員。趣味は登山、バロック音楽鑑賞。写真とデザイン（特にブックデザイン）活動は、自ら主宰する想像上のデザイン・ハウス“Studio 1110”を通じて行なっている。著書は『町並み保存運動の論理と帰結』（単著、東京大学出版会、2018年）、『原発災害・避難年表』（共編著、す



堀川ゼミ公式サイトへのQRコード



Photo by Saburo Horikawa.



Photo by Saburo Horikawa.



Photo by Saburo Horikawa.

いれん舎, 2018年), *Japanese Constitutional Revisionism and Civic Activism* (共著, Lexington Books, 2021.4), *Why Place Matters* (単著, Springer, 2021.6), *Environmental Victims' Movements in East Asia* (共編著, Palgrave Macmillan, 2026.4) など。

・詳しくは堀川および堀川ゼミの公式サイトをご覧ください。

■ 代講教員・竹村英樹先生からのメッセージ

<社会学的想像力>を駆使して学ぼう

堀川ゼミのみなさんと私は2026年4月から1年間、ご一緒することになる。この1年間で教えたことは山ほどある。その中から、2つ取り出してみよう。

まず、アカデミックな研究作法を学ぶことだ。研究書の読み方、レジュメの切り方、参考文献表の作り方、注の付け方、文献の探し方—これらはどのゼミに所属しても意識して学べば、身につくことだ。この基礎的なトレーニングは独学でも可能であるが、3年間をかけて身体化するのがよい。だから、ゼミでは意識して、研究上の形式を指示する。「勝手にやっておいてください」とはしない。勝手にやりたいと思うほど楽しい作業ではないから。「あとでテストする」というやり方もしない。義務で覚えてもすぐに忘れてしまうから。

第2に、体験は大切だ。でも体験だけではダメである。これにはいい文章があるので引用しよう。

「体験しても社会は見えない」

社会の一部だけを見て、それで社会を見たと思う人が少なくありませんが、そうはいきません。ある種のことで「現地に行ってきた」という人の見聞がものをいっても、社会を見る目が備わっていない人がいくら「見てきたんだから確かだ」といっても、それは怪しいのです。体験をすれば、「社会の一部を見ている」ということは確かです。しかし、地球の一部である地面を見ても「地球を見た」とはいわないように、社会のごく一部だけをみても、それで「社会を見た」とはいえないのです。社会の全体像を見るには、統計的なデータを集めることが必要なのです。(板倉1992:70)

それでは、社会統計データで示された社会像を実感をもって理解できるのでしょうか。私は「現地にいって見てごらん」、「当事者に会ってきてごらん」とよく言う。引用した文章と矛盾するように聞こえる。しかし、統計的なデータとその数字の一断面である<個人の体験>をどうつなげるのか、そこに「社会学



Photos by Satoshi Morihisa (00).

的想像力」(C. W. ミルズ)が必要となる。

ゼミの3年間で「社会学的想像力」を駆使して、社会現象を対象として研究してください。Iゼミ論文、IIゼミ論文、そして、集大成の卒業論文を書いて研究を形にします。ゼミの時間はもとより、夏合宿、社会科見学(たまには教室の外に出てみましょう)、コンパでのおしゃべりなど、多くの機会に問いかけます。みなさんも問いかけてください。

社会学を学ぶ者として体得して欲しいことがたくさんある。それはゼミが始まってからの楽しみ。学ぶプロセスを大切に、たのしく一緒に学んでいきましょう。

■ 卒業生は語る——「堀川ゼミ」とは何であったのか

□ ゼミでの忘れられない思い出

なにか大学生らしいことがしたいと、サークルの先輩に薦められて、堀川ゼミへ参加したことがきっかけでした。それまで、受動的に生きてきた私をはじめ自分からやりたいことを見つけ、アクションを起こし、卒業論文という形として output を出せた思い出の場所であったと思います。自分がやりたいことを先生やゼミ生のみんなに支えられながら思う存分に進められるという経験は、社会人になっても得られるものではないと思います。また、堀川ゼミで培った“Say it with data”といった考え方や経験は社会にでてからもとても重要になると私は確信しています。(4期生・田淵由記・情報関連会社勤務)

□ 基盤形成の場として堀川ゼミ

ちよっと大きな表現をすると、私にとっての堀川ゼミは「自分の基盤を形成した場」だと思う。堀川ゼミという“場”を通じて、いままで「当たり前」だと思っていたことに疑問を持つようになった。疑問について、真剣に考えるようになった。自分の頭の中にある考えを他の人に正しく伝えるには、どんな言葉を使ってどうやって話せばよいのだろうか、意識するようになった。相手が話している言葉を聞くだけでなく、その背景や前提まで含めて理解するための努力をするようになった。私は“SE”という、ゼミの内容とは一見なんの関連性も持たない職業に就いているけれど、堀川ゼミで学んだ「考えること」「人に伝えること」「人の話を聞くこと」は、私の強みとなっている。(4期生・宗像美智子・NEC ネクサソリューションズ勤務)

□ From 研究室 To 日常

問うべきテーマって何だろう。ゼミに入ってから、毎日頃自分に問いかけている課題だ。ゼミでは、文献講読をし、その文献についてまとめたレジュメを持ち寄ってディスカッションをする。例えば、「電車内で化粧をしている人に不快感を覚え



Photo by Kanako Arano.



Photo by Yudai Matsuyama (14).

自らデザインした60周年記念バナーの前で



Photo by Saburo Horikawa.



Photo by Saburo Horikawa.

一緒に走り切った仲間だからこそその笑顔

る」理由について、公共圏と親密圏という概念を使って議論していった。文献に書かれている内容で十分か、何か新しい切り口もあるのではないかと。活発な議論が出来るときもあれば、考え込んで沈黙が続くときもある。さらには、堀川三郎、もとい「堀川しゃべろう」の独演会になることも……（笑）。そんなゼミ活動を通じ、社会学を使って身の回りの世界がどう見えるのか、を考えるようになった。他の講義の教室で、会場案内の仕事をやるライブ会場で、高校の友人と話す飲み屋で、小説を読む電車内で。些細なきっかけで「これって社会問題かも」と考える。毎年12月にはゼミ修了論文の構想発表がある。自分が何を追究したいのか、発表が上手くいかないと、泣きたくもなる。でも、文献で学んだことを胸に自分の問うべきテーマを見つける過程は、今の自分の大きな糧になっていると思う。それは、ゼミでしか経験できないこと、ゼミでしか得られない力だと思う。先生の小さな研究室で濃密な議論をし、時にはコーヒーを飲みながら堀川先生のスーツ談義に耳を傾ける。自分の限界に挑む「社会学的1000本ノック」を通じて自分を見つめることができる。堀川ゼミとは、そんな空間なのではないかと思う。（7期生・前田尚希 [在籍当時に書かれたもの]）

□ 贅沢な時間

大 学に入って間もない頃、高校と大学との違いを教授たちは「大学は高校のような勉強とは違い、自分の興味があるものを研究できるおもしろい場所だ」と言っていた。たが、私は1年次が終わっても大学をそのようにおもしろい場所だとは感じる事ができなかった。飲み会では「大学ってこんなもんか。案外退屈だな」と友達と語っていた。しかし真剣に学問を学びたいと思い堀川ゼミに入ってほぼ一年がたった今、飲み会でそんな話はもうしないだろう。研究室で行われるゼミは、ひとつの議題に関してみんなで頭を悩ませて議論をする。「サブゼミ」では時間を忘れて、学部棟閉館ぎりぎりまで続く議論になる。議論、議論、そしてまた議論……。疑問点があれば他の文献を読む。文献を読めば読むほど自分の無知さが証明されていく。学問を学ぶことはゴールの見えない苦しみでもあるが、今まで経験したことのない「おもしろさ」も感じる事ができる。このゼミを通じて一年間学んできた今、自分が研究すべきことが視えてきた。来年時からはもっと大学をおもしろい場所にできるかも知れない。多くの本に囲まれ、テーブルランプの暖かい明かりが照らすなかで行われるゼミ。熱くなった議論のあとはジャズを聴き、知的好奇心を掻き立てられる先生の話で余韻を過ごす。大学でこんな贅沢な時間を過ごせる場所が他にあるのだろうか？（8期生・佐々木健太 [在籍当時に書かれたもの]）

□ 堀川ゼミを振り返って

「この感覚は、どのような言葉に置き換えられるのだろう。フィールドにいる時はもちろん、最寄り駅から自宅ま



Photo by Satoko Kusunoki (12)



Photo by Saburo Horikawa



FSS File Photo, 2015.

での時間など、ふと気がつくと卒論テーマと向き合い、「言葉」を紡ぎだそうとしながら日々格闘している自分がいた。「これだ」と思える「言葉」に出会った瞬間には、冷や汗がジワっとでてくる。卒論を書く「楽しさ」が、締め切りが迫れば迫る程、不思議と増していった。卒論の構想は何度練り直しただろうか。練り直す度に本気で向き合い、議論をしてくれるゼミの同期、そして堀川教授がいた。時にはまったく違う角度からボールが飛んでくることや、真っ向からの直球ストレート勝負の時もある。その場では、バットにボールを当てることに必死だ。だが、そこでゼミ終了後の「自主練」をやるかやらないかは自分次第。「自主練」があるかないかでボールの見え方、捕らえ方は全く異なってくる。そして、私の知るゼミ生達は、その「自主練」を進んでやっていた。答えはすぐにはわからない。だが、また一から考えなおすことはできる。正規のゼミ時間以外でも、あれほど熱く議論ができたこと、「切磋琢磨」とはまさにこのことだと思った。自らのテーマに対する追究は、卒論を持って終わったわけではない。むしろこれが、始まりだと言っても過言ではない。大学を卒業しても堀川ゼミで身に付けた学びの姿勢は、決して衰えないだろう。堀川ゼミで学びたいという意味があれば、「知的興奮」に出会えるはずだ。しびれるような議論、そして自らの探求したいテーマととことん向き合い突き詰めた先に、また新たな発見や出会いが待っているのかもしれない。(8期生・田沢穂 [在籍当時に書かれたもの])

□ 「問いかける」堀川ゼミ

ゼミ活動に関してみなさんそれぞれのイメージを持たれている事と思います。「自分のやりたいテーマって何だろう」「就職活動に役立つのかな」等々。僕が一年間堀川ゼミで過ごして感じたのはこうです。「常に問いかける事が要求される」。ゼミの宣伝文としてこれはキャッチーでは無いので失格かもしれませんがね。しかし情報が10年前よりも格段に量が多くなっている現代において、この「問いかける」作業はより重要度を増しているとの認識を持っています。これは今回の地震関連のメディアの問題のみならず、絵画・音楽といった芸術活動にも、そして先程の自分のテーマを決める事、更には自己との対話の手段としても必要とさえ僕は思うのです。さて、これはこれまでのゼミの感想でありまして、僕ら3年生のゼミでは、社会学の話に付随して天野さんの映画の話、僕の音楽の話が縦断的に扱われ、時には無知識を叱咤されつつも(苦笑)、先輩的確なコメントとともに、刺激的な時間を過ごしています。このゼミが一般的な「就職活動」に役立つかは、僕はまだ分かりませんが、想像とは違う次元の楽しみがあると、一年過ごしただけでも言えるゼミであるのは間違いありません。(9期生・大原巧 [在籍当時に書かれたもの])



Photo by Saburo Horikawa.

□ 「学生をあきらめていない」堀川ゼミ

「先生が学生をあきらめていないところです」。僕が学部3年生の時、堀川ゼミは学内誌のゼミ紹介という特集で取り上げられた。冒頭の言葉は、その特集のためのインタビューで、堀川ゼミの良いところを聞かれたときに、僕が答えたものだ。当時の僕は、この言葉をうまく説明できなかった。けれども3年経った今、少しはこの言葉を説明できるような気がする。僕が社会学部に入學して、いくつかの授業やゼミを経験していくなかで感じたのは、他の先生に比べて堀川先生が「研究者」として教壇に立っているということだった。大学の先生というのは、「教師」と「研究者」という二つの顔を持っている。多くの先生が教師として学生に接する一方で、堀川先生は第一線の研究者として、学生に向き合っているように私は感じた。これを感じたとき、他の先生に比べて、堀川先生が学生に対して「あきらめていない」と思ったのだろう。当時のこの認識は、いくつかの誤解を持ったものかもしれない。しかし、全く間違っただけのものでもない、堀川ゼミを経験した僕は思う。(10期生・松山雄大 [上智大学大学院博士課程在学中])



Photo by Saburo Horikawa.

□ 何とも言えない「達成感」

私が大学に入って1年経とうとしている時に、ふと思ったことが「このままでいいのだろうか?」という事でした。友達もできて、サークル行ったりバイトしたり遊びに行ったりと楽しい学生生活を送っていました。でも、授業に出て、レポート出してテスト受けて成績が出て……最低限、単位をもらうために「そつなくこなす」ことが出来ていればいいという感覚になっていた自分に気づいたのです。面白そうだと思って社会学部に入ったのに、サークルとか勉強以外のところばかり充実して、社会学の事を全然知らないままそれなりに単位を取って卒業してしまいそうな自分がいました。大教室で講義を受けている受け身のままでは、中学・高校と変わらないと思い、堀川ゼミに入りました。文献を読んでレジュメを作った後、ゼミで密度の濃い時間を過ごした後はいつも反省点を噛みしめながらも、何とも言えない達成感がありました。たぶん、一週間の中でゼミの事をしている時が一番頭を使っていると思います。逆に言えばゼミに入っていなければそんな経験はめったになかったと思います。ゼミに入って1年経っても毎回ゼミの前は緊張と不安でいっぱいですが、今日は議論でどれだけのことが学べるかな、と楽しみでもあります。自分はまだまだだな、と思う時がたくさんありますが、1年生の時よりももっと濃くて楽しい学生生活を送れるようになったと実感しています。(12期生・森岡 藍 [在籍当時に書かれたもの])

□ 自分の問いを立てる、自分の頭で考える

この1年間、堀川ゼミで感じたことは常に自分に問いかけ、その問いの答えを考えることが要求されるということ



Photo by Saburo Horikawa

す。うまく問いが思いつかず自分はまだまだだと実感することもたくさんありました。しかし次のゼミの時間ではしっかり問いを立てられるように自分の頭で考えて問いに答えられるように調べることで、少しずつではありますが視野が広がったと感じます。堀川ゼミの1年間は正直大変でしたがその分得たことも大きかったなと思います。(13期生・真鍋佳那子 [在籍当時に書かれたもの])

□ 世界が広がるきっかけ

私は、社会学とはどんな学問なのかよく知らずに社会学部に入り、よく分からないまま1年生を終えてしまった。堀川ゼミでは社会学の根幹の部分ゼミの仲間と文献を吟味しながら学ぶ。そこで学んだ社会学の考え方は個人の研究を進めていくうえで応用し、社会学の方法を実践していく。また、日常生活で起きる出来事やニュースで報道される出来事に関しても自分なりの考え方を持つようになったように思う。堀川ゼミに入っていなかったら絶対に読まない文献を手取るようになり、世界が広がるきっかけになった。(13期生・青木明澄 [在籍当時に書かれたもの])

□ 言葉にならないものとの格闘

私は地元から県外に進学する時に感じた周囲の人から強い圧力をなぜ感じるのかを3年間のゼミ論文のテーマとして取り組みました。大学1年生の時、外から地元を見ていた私はそのことにモヤモヤを感じつつも、当時の私には、この疑問を明快に語る力量はありませんでした。しかし、2年生になりゼミに入ってから、週一回のゼミで先生や同期との議論を通して、物事を考え、深めていく上での基礎を鍛えることができました。また、本やインタビューを通して知識を得ることで、最終的に自分なりの答えを出せました。これだけ聞くと敷居が高いように思えますが、私も失敗を繰り返し、試行錯誤し、ようやく卒業論文で論文の形に出来たので、最初から何もかも出来た訳ではありません。最初はレジュメをどのように作るか、どのように本を読むかをゼミ生や先生と一緒に考えて積み上げていくので、自分の興味があることに懸命に取り組んでみたい人にはピッタリなゼミだと思います。また、合宿やバーベキューなど先輩や後輩と交流できるイベントもあるので、勉学以外にも充実しています。(14期生・宮里遼大 [在籍当時に書かれたもの])

□ 堀川ゼミという環境の教育力

大学における学びとは何か—みなさんは、この問いにどのように答えるでしょうか。私なら、次のように答えます。「大学における学びとは、自分の中にある心からの問いを突き詰め、言葉で説明できるようになることである」と。堀川ゼミでは3年間同じテーマで研究を続け、論文を執筆します。心からの問いと長期間向き合い、それを解き明かすことは高校までの学習



Photo by Saburo Horikawa.

とはアプローチが大きく異なり、その道のりは決して楽ではありません。しかし、堀川ゼミではそうした自身の問いと向きあうための環境が整っています。2年次では社会学の基本的な文献を読み進めるため、自分の問いを言語化し、論文を執筆するための地盤を形成することができます。また、学生の言いたいことを汲みながら切れ味鋭いコメントをくださる先生や、同じ目標を持ち、論文の一読者として違った視点からアドバイスをくれる仲間の存在が論文の執筆を後押ししてくれます。ここまで聞くと私がはじめてから勉強熱心だったように思えるかもしれませんが、かくいう私もゼミに入る前まではなんとなく授業を受け、テストの点を稼ぐために勉強する一学生でした。そんな私も堀川ゼミに入ってから「この授業の〇〇理論、使えるかもしれないな」と考えるようになるなど、他の授業を受ける姿勢も変わりました。入ゼミから最後まで楽しみながら卒業論文を執筆できたのは、堀川ゼミのもつ「環境の教育力」のおかげだと確信しています。大学における学びを経験したい、周りの仲間から刺激を受け、切磋琢磨しながら問いを突き詰めたいたい—そんな人にお勧めしたいゼミです。(16期生・森田遼太・横浜市役所勤務)



Photo by Saburo Horikawa.

□ 学ぶことの楽しさと美味しさ

一年間のゼミ生活において学んだのは「一歩踏み出せば、道は拓ける」ということです。悩みながらも参加した小樽でのフィールドワークでの学び、そしてゼミ合宿の文献選びの中で偶然出会ったM. アルヴァックスの記憶論は私の卒業論文の重要な核になってくれました。それらは、堀川先生の「まずは書いてみよ、やってみよ」という言葉や、ゼミ生の励ましに支えられたからこそ挑戦し、成し遂げられた結果であったと思います。自身の立てた問いと向き合うことは、苦しみも伴いますが、一歩踏み出せば今まで見えなかった世界の広がりを感じることが出来ます。そんな学問する楽しさを知ることが出来たこと、そして共に切磋琢磨できる仲間に出会えたことは私の人生において大きな財産になりました。堀川ゼミで学ぶことが出来て本当に良かったです。(16期生・川村麻衣・東京都庁勤務)

□ 自由でどこまでも行ける場所

私にとっての堀川ゼミとは、「自由でどこまでも行ける場所」です。「自由」というのは、堀川ゼミ全般に言えることです。例えば、堀川ゼミの3大イベントである、BBQ、ゼミ合宿、卒論口頭試問は、企画や準備、当日の運営ともに学生に任されています。また、本ゼミに持参するレジュメの体裁や論文のテーマなども基本的には学生の自由が尊重されます。このように、堀川ゼミでは、教授から科される制約が少なく学生の自主性が尊重されるので、自分のしたい研究やゼミ活動に自由に打ち込めます。次に、「どこまでも行ける」というのは、「その気になればいくらかでも研究に打ち込める」ということです。それ



Photo by Saburo Horikawa

は、堀川教授が学生を諦めていない、というのが大きな理由です。特に堀川教授の論文に関する指導には妥協がありません。ゼミ生の論文を少しでも良いものにしようと、全力で指導をさせていただきます。ゆえに、学生はどこまでも研究を深めることができます。また、ゼミの仲間も、切磋琢磨の中で自分の研究を強くサポートしてくれるのは言うまでもないでしょう。以上のことから、堀川ゼミとは、「自由でどこまでも行ける場所」なのです。(16期生・川瀬尚大・鎌倉市役所勤務 [在籍当時に書かれたもの])

□ 留学生の私が見た堀川ゼミ

堀川ゼミでは、3年間をかけて「自分の問い」を探り、それを問い続ける。この中核をめぐって、充実した読書と議論が行われていた。社会学の基本文献ないし古典を読み、教授やゼミの仲間と議論することは、「自分の問い」について思考するための素養を養うことになる。このゼミでの学習に関する部分は「充実」の域をかなり超えていた時もあったが、外国人である私でもなんとか乗り越えることができた。卒業してから振り返るということをするまでもなく、その場で確実に楽しさを感じていた時期も沢山あったように思う。つくづく、ゼミの選択は大学生活を大きく左右するという気がする。もし大学で学問の道を歩むことを考えている、あるいは「自分の問い」が環境社会学・都市社会学の分野にあるのなら、このゼミは選択としてベストだと思う。(16期生・陳黄作明・株式会社ワタル勤務 [在籍当時に書かれたもの])

□ 私が大学を辞めないわけ

私は、もし堀川ゼミと出会っていなかったらきっと大学を辞めていただろう。大袈裟に言っているように聞こえるかもしれないが本当のことなのだ。勉強なんて本を読んで知識をつけることだと思っていた(正確にはその当時本をあまり読んでいなかったが)私にとって、毎週共通の文献を読み、レジュメを作り、議論するというベーシックなスタイルで見方によっては単調なゼミでの一年間は私を大きく変化させた。暖かい電灯の灯る小さな研究室の中で、仲間の読み方、教授の読み方を知る。毎日が発見の連続だった。議論が行き詰まったときには、そっと教授が手を差し伸べる(しばしば起こる教授の長い長い脱線も最終的に議論の終着点にぴったり辿り着くのがこれまたすごい)。分かるということは分けること、そうして物事を分割していく中で、一見すると関係のない事柄がどんどん結びつき、自分の世界の見方が少しずつ変わっていく。この感覚は、共に学ぶ仲間そして堀川教授がいるゼミの空間がなければ味わうことができなかったように思う。(16期生・笹川登夢 [在籍当時に書かれたもの])

□ 本当の学び



Photo by Saburo Horikawa.

私が堀川ゼミに入った理由は、中途半端な学びではなく、これを頑張ったと自分で納得できる学びを学生時代に得たいと思ったからだ。堀川ゼミでの活動は、常に自分で考え、それを言葉にしないことには始まらない。これこそが学ぶということなのだと思う。かつての私は、誰かの発言を特に自分自身の中にかみ砕いて考えることなく、鵜呑みにしてしまってた。だが今は、まず自分で考え、そして自分自身の言葉を持つということを大切にしている。私は堀川ゼミで、教授と仲間とともに、本当の学びに出会うことができたのだ。(17期生・田口智尋・住宅設備メーカー勤務)

□ 「考える力を養う」

堀川ゼミは、“考える力”を養うことのできる場所です。原発事故があった日本で、原発が稼働し続けるのはなぜだろう。パリのように統一感のある街並みと比べて、日本の都市が雑然とした街並みなのはなぜだろう。このように、堀川ゼミでは「自ら自由に問いを立て、その答えを考える」ということを繰り返し行います。時には、その問いをゼミ生同士で議論します。議論のときは、自分の考えを、他の人に分かりやすいよう、言葉にする力が問われます。やってみると意外と難しい。誰でも最初からできるわけではありません。だからこそ、ゼミでは安心して失敗できる場でもあります(笑)。私が堀川ゼミで失敗を重ねながら培ってきた、“考える力”は社会人になっても役に立つと確信しています。実りある大学生活を過ごしたいと考えている人は、ぜひ堀川ゼミへ！(17期生・大槻光・リノベーション関連会社勤務)

Photo by Saburo Horikawa.



□ 大学ならではの学び

堀川ゼミは、社会学やそれ以前の学問をするにあたっての基本的な部分はもちろんのこと、それぞれの研究分野に関して、先生や他のゼミ生達と話し合う中でより深いものとしていける環境であると感じます。また、否が応でもたくさんの文献と触れる機会があるため、意外と経験できない大学ならではの学びができ、気づきを得られることが多くあります。大変に思うかもしれませんが、その分得られるものは間違いに多いため、学問をしっかりと修めたいと考えている人にはピッタリなゼミだと考えます。(19期生・吉江雄登 [在籍当時に書かれたもの])

Photo by Saburo Horikawa.



□ 多くのヒントが隠れる場

大学の学びと高校までの学びは異なるという言葉は、1年生当時の私にはピンと来ない言葉でした。しかしながら、上手く説明できないものの、「確かに違う」と2年生の私に教えてくれたのが堀川ゼミでした。堀川ゼミは、文献を読む力、意見を明瞭に伝える力、レポート作成の作法、良質な議論の展開方法、そして、じっくりと思考し問いと向き合う時間と契機を提供してくれる、最良の場であると考えています。大変な部分も



Photo by Saburo Horikawa.

多くありますが、私は堀川ゼミを選んで良かったと感じています。(19期生・橋立大駿・優秀卒論に選出・読売新聞記者 [在籍当時に書かれたもの])

□ 過去の自分に拍手を

堀川ゼミを1年間経験してみて、自分の考える力がいかに足りなかったのかを思い知らされた。文献の核を捉えきれず、ただの要約でしかないレジュメを書くので精一杯だった。ただ課題を出して単位を取るというだけの機械的で味気ない大学生活を送っていた私にとって、ゼミでの学びは負荷が大きすぎたのかもしれない。しかし、それだけ得られたものもたくさんあったように思う。このゼミでは文献をただ読み込むのではなく、自分なりの観点を持って分析し、思考を深め、それを言葉にしていく。その過程で得られたものは、自分の論文に還元される。最終目標である卒業論文は、大学生活の集大成となるだろう。私も先輩方のような素晴らしい卒論を生み出せるように、これからも研鑽を積み重ねていきたい。自分の力で問いを立て、それを丁寧に育てていくこと、これこそが大学でしかできない学びであり、堀川ゼミで体験出来ることだ。本気で大学の勉強を試みたい！と思い堀川ゼミの門を叩いた過去の自分に拍手を送りたい。大学生活で何かを成し遂げたい、一緒に頑張ることができる仲間を作りたい、と思っている人は是非堀川ゼミへ！(20期生・越後日向子・宮城県庁勤務 [在籍当時に書かれたもの])



Photo by Saburo Horikawa.

□ 熱心で気さくな先生、切磋琢磨できる仲間

堀川ゼミでは、社会学の基礎や大学での学び方を一から教えてくれるので、学びの土台が着実に固まっていくのを毎回のゼミが終わるたびに感じました。毎週のゼミでは指定された文献のレジュメを全員が作ってこなくてはならないため大変苦労しましたが、その分問いを立てて本を深く読む力や自分が立てた問いから思考を深める力、自分の思考を文章にまとめる力が養われ、学期が終わった際には大きな達成感がありました。また、堀川先生はとても気さくで熱心な先生で、学生の疑問に丁寧に答えてくださる他、学生同士の主体的な議論を尊重してくださります。そのため、ゼミは多くの時間が学生同士の議論に時間が当てられ、先生は議論の補助をしてくださったり、最後に総括してくださったりして助けてくださります。毎年秋学期に各自が書くゼミ論文のテーマ選びや文献選びも学生主体です。ゼミの雰囲気は、「堀川ゼミは厳しい」という噂のせいか、少人数でやる気のある学生しか集まらないので、手を抜けない良い緊張感の中で仲間と切磋琢磨できる環境です。(20期生・成岡優輝 [在籍当時に書かれたもの])

□ 正解のない問いに立ち向う

堀川ゼミは、社会学の基礎を徹底的に鍛え上げ、その集大成として自分だけの問いを形にする場所です。日々の活動に



Photo by Saburo Horikawa.

おける文献講読やレジュメ作成は、決して楽な作業ではありません。しかし、著者の思考を深く読み解き、仲間と議論を交わす時間は、物事を多角的に捉える眼を養ってくれます。私は自身の足で調査を行い卒業論文を執筆しましたが、そこで直面した正解のない問いに立ち向かえたのは、それまでに培った基礎の土台があったからこそだと感じます。ここは、未熟な意見も真剣に受け止めてくれる先生と、どんなときでも支え合える仲間がいる失敗できる場所でもあります。大学生活で何かに本気で打ち込み、確かな思考力を手に入れた人にとって、堀川ゼミは最高の環境になると思います。(21期生・花輪泉宏 [卒業時に書かれたもの])

□ 学問を真剣に取り組めるゼミ

私は堀川ゼミを最後まで続けたことで自分の問いが何であるのかをあきらめることなく挑戦して考えられた。ただ、はじめは自分の中にある問いを見つける以前に社会学に関する文献を読みこむことすらできていなかった。毎週の文献を読んでレジュメをつくり議論をすることを積み重ねたことで徐々に本の書かれている意図を読み解けるようになり、自分の興味のある文献も読めるようになった。この文献講読は自分の中にある問いが何であるのかを考えるきっかけの一つになったと思う。文献講読だけでなく、堀川ゼミではそれぞれ1ゼミ2ゼミと2回のゼミ論文を試行錯誤しながら書き、自分の問いとは何かを深めることができる。何度も自分の問いが何であるのかと迷うときもあったが、堀川先生が手厚く指導して下さったりゼミ生同士でもアドバイスを言ったりする環境であるため、最後まで自分の問いと向き合うことができた。文献講読や2回のゼミ論文の執筆をすることで有意義に学びを深められただけでなく、堀川ゼミで自分の問いを明らかにした卒業論文を書けたことは良かったと思う。(21期生・落合美月 [卒業時に書かれたもの])

□ 高く険しい山に登る

私は現役生より3年遅れて、法政大学社会学部に入学した。高校卒業から入学までの3年間という時間は、私の世界観を大きく変え、「大学で何を学ぶべきか」という目的意識を明確にしてくれた。入学当初から、何よりも真剣に「学問」に打ち込みたいと強く願っていた私にとって、いわゆる「ガチゼミ」として知られる堀川ゼミを選んだのは、必然だったと言える。堀川ゼミで過ごした3年間は、堀川先生をはじめ、優秀な先輩、同期、後輩からハイレベルな刺激を受ける毎日で、自身の未熟さを痛感する日々でもあった。常に高い目標となる仲間に恵まれたことは、私にとって非常に幸運なことだった。ゼミでは常に「問い」と向き合い、議論を通じてそれを深めていく。当然、最初から上手くはいかない。しかし、試行錯誤と失敗を幾度も積み重ねていくうちに、ふと振り返れば、自分が大きく成長し



Photo by Saburo Horikawa.



Photo by Saburo Horikawa.

ていることに気づく。日々の課題や研究に追われている最中は必死で余裕もなかったが、卒業論文を書き終えた今、ようやく自分がどれほど高く険しい山を登ってきたのかを実感している。堀川ゼミでの日々は、私にとってかけがえのない財産である。私の大学生活は、ゼミに所属した2年次から本格的に始まったと言っても過言ではないほど、濃密な時間だった。大学生活を漫然と終わらせたくない、何かに真剣に打ち込みたいと考えている人は、ぜひ一度、堀川先生を訪ねてみてほしい。きっと、ユーモアを交えながらも、真摯に向き合ってくれるはずだ。(21期生・島袋光弥 [卒業時に書かれたもの])

□ 最良の選択

失敗の先にしか成功はない——私のゼミ生活は、そんなありきたりに思える言葉を痛感した三年間であった。私のゼミ生活は失敗にあふれていた。取り組んでいたテーマが自分の腹の底からの問いではないことに気がついた二年生、問いを見つけたが時間が足りずにゼミ論文をうまくまとめることができなかった三年生。そんな自分の失敗に気がつくのは、いつもゼミ論文を書き終えてからだった。四年生の一年間は、これまでの失敗を糧に卒業論文の執筆に取り組み、無事に卒業論文完成にこぎつけた。内容は未熟ではあるものの、これまでとは異なり現時点での全力を尽くすことができたように思う。この卒業論文を支える問いは、ゼミ論文執筆に失敗しながら普段は表に出すことのない自分の声に向き合うことでしか生まれなかったし、この試行錯誤がなければ、卒業論文を完成させることもできなかっただろう。私にとっては、失敗しながら腹の底からの問いを見つけることは嘘偽りない自分に出会うことであり、それを可能にしたのがゼミでの学びだった。ただ、何度も失敗できることだけが堀川ゼミの魅力ではない。このゼミは、社会学を通して様々な「方法」を学び、自分と問いを磨く場であると同時に、ともに高め合う仲間と出会える場所でもある。ここには成功の過程にある失敗を笑う人は誰もいない。失敗の先で先生や仲間と共に真剣に自分と向き合えることも大きな魅力だと断言できる。そんな学問に本気で向き合う仲間と過ごした三年間は、非常に充実しており実りの多い時間であった。堀川ゼミを選択したことは私の大学生活における最良の選択であったと強く思う。成長するには行動あるのみ。失敗を繰り返しながら自分に向き合い、社会学を修めたい人はぜひ堀川ゼミに入ってほしい。(21期生・高橋 慧・優秀卒論に選出・法政大学大学院に進学 [卒業時に書かれたもの])



Photo by Saburo Horikawa.



Photo by Saburo Horikawa.

■ 現役生も語る——現在形としての「堀川ゼミ」

□ 悩んでいるあなたへ

堀川ゼミに入ろうか悩んでいる、または、そもそもゼミ自体に入るか迷っている学生の皆さんへ。堀川ゼミでは「社会学とは何か」という社会学の基本から学ぶことができます。私はメディア社会学科所属ですが、「社会学部に入ったからには社会学をきちんと学びたい！」という想いでゼミを選びました。堀川ゼミに入ると、2年生のうちから個人研究のテーマを決定し、2,3年でゼミ論文、4年で卒論と計3回論文を書くことになり、苦勞することもあります。探究心の強い方、学問を通じて大学生活をもっと有意義に過ごしたい方にはおすすめのゼミだと思います。研究テーマは自由に決められるということに加えて、他のゼミよりも論文執筆の期間が長く、途中でテーマを変更することもできるので、2年生の時点で満足のいくゼミ論文が書けなかったとしても、長い時間をかけて研究の精度を高めることができます。「そもそも研究って何から始めればいいのか」といった疑問もあると思いますが、ゼミ活動を通してじっくり学んでいくことができるので安心していただければと思います！私は個人研究を通して、忍耐力と考える力を少しは伸ばすことができたのではないかと感じています。これを読んで、少しでも堀川ゼミに興味を持っていただけたら嬉しいです。皆さんとゼミでお会いできることを楽しみにしています。(22期生・小貫菜々)

Photo by Saburo Horikawa.



□ 確かな熱量

堀川ゼミの最大の魅力は探究心にあると感じています。各々が個人研究に努めるなかで、互いに知恵を持ち寄り、それを最大限に活用すべく、議論を通して探究を続けています。それはゼミ生たちが確かな熱量を持ってゼミに取り組んでいるからこそ出来ているのだと最近特に実感しています。そうした本気の探究のなかで、堀川先生からの助言や考察がさらなる起爆剤となり、本当の意味で知の探究が進んでいきます。大学生活を彩るピースとして、堀川ゼミは間違いなく鮮烈かつユニークなインパクトを与えてくれると、私は思います。(22期生・大野滉生)

Photo by Saburo Horikawa.



□ どんな授業よりも濃い時間

堀川ゼミでは文献を読み、レジュメを作成し、それを持ち寄り議論する、これを毎週行うというのが基本的な進行である。淡々としているように思われるかもしれないが、毎週この100分が大学のどんな授業よりも濃い時間であると私は思う。自分で文献を読んでいる段階では気づくことができなかった視点を同期から得たり、議論によって新たな考えが浮かんだりしたとき、自分の未熟さを感じると同時に自らの成長を感じることもできる。私にとって堀川ゼミはできることもでき



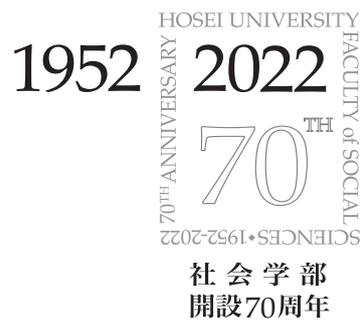
Photo by Saburo Horikawa

ないこともすべてさらけ出して成長できる場所、である。1ゼミでは特に社会学に関する基礎的な文献を読み、「社会学とはなにか」、「研究する、とはどういうことでどのように行っていくのか」ということを様々な文献を通じて学んだ。大学1年時の授業を通してより深く社会学を学びたいと思った人、自分の問いを見つけて研究したいと思った人にはうってつけのゼミである。同じ志を持った仲間とともに熱心にゼミ活動を行いたい人はぜひ堀川ゼミに入ってほしい。(23期生・渡邊紗里)

□ 誰かの正解ではなく、自分の問いを追う

中 高の6年間、私はサッカー一筋でした。勝つために何をすべきかが明確で、努力の向きもはっきりしていました。受験も同じで、苦しいけれど目標があり、「ここに向かえばいい」と思える正解がありました。だから大学に入ったとき、どこかで少し安心してしまった自分がいました。ところが入学してしばらくすると、急に道が見えなくなり、「次は何を目指す？」と聞かれても答えが出ない。正直、大学に入った意味さえ分からなくなり、大学を辞めて働くことを本気で考えたこともありました。いま思えば、大学が人生の「ゴール」ではなく「中間地点」だという感覚を、十分に持てていなかったのだと思います。その空気をはっきり変えたのが、1年の秋学期に出会った堀川先生でした。講義が面白いのはもちろんですが、他の教授とは何かが違うと感じました。大教室が満員なのに、ざわつきがずっと消えて、視線が一斉に先生へ集まっていく。入学して初めて見た光景でした。例えるなら、Appleの新型iPhoneを発表するスティーブ・ジョブズのように、会場の空気が切り替わっていく感覚がありました。そこで一番刺さった言葉が、「脳みそで汗をかこう」。この一言で、大学の意味が変わったのです。大学は知識を覚える場所だけではなく、自分で問いを立て、その問いに向けて粘り強く向き合う場所、そう実感しました。堀川ゼミが大切にしているのも、まさにそこです。このゼミがやるのは「べき論」ではありません。「こうあるべき」と価値観を押しつけるのではなく、徹底的に「なぜ？」を問います。なぜ、それが当たり前になっているのか。なぜ、人はそう動き、社会はそう回っているのか。誰がヒーローで誰が悪役か、という単純な物語で終わらせず、その仕組みを根拠を手がかりに理解しにいきます。すると面白いことが起きます。今まで当たり前だと思っていたことが、急に当たり前ではなくなり、自分の考え方や感じ方さえ、「これって本当に自然？」と一步引いて見られるようになります。その経験を通して、大学は「誰かが作った正解を取りに行く場所」ではなく、「自分で問いを立てて追い切る場所」なのだ腑に落ちました。とはいえ、今の私はまだ未熟で、「これだ」と言い切れる問いを探している途中です。それでも、いつか心の底からやりたいと思える問いに出会ったら、泥臭くてもいいから、そこにしがみついて追求したい。そのために堀川ゼミで、問いの立て方と、それを言葉にして伝える力を鍛えています。そし

て最終的には、自分の考えを明晰に語れるようになりたいです。私がいま大事にしている基準は、100点より100%です。堀川先生は、こちらが本気で向き合えば、同じ熱量で、いやそれ以上で返してくれます。だからこそ、妥協せず、本気で向き合っている場所だと思えます。もし今、大学生活の中で立ち止まっているなら、堀川ゼミで自分の「問い」を見つけ、粘り強く追い切ってみませんか。(23期生・古賀右梗) ■



学部開設 70 周年公式ロゴ (デザイン=堀川三郎)

堀川ゼミ募集要項 2026: Seminar Prospectus

2026 年 4 月 1 日発行
編集・発行=堀川三郎

〒 194-0298 東京都町田市相原町 4342
法政大学社会学部 堀川研究室

文・写真およびレイアウトデザイン=堀川三郎 (著作権保有)
Cover photo: A book with an awful lot of Post-It (Copyright © 2025 by Saburo Horikawa)

Layout design by Saburo Horikawa ("Studio 1110")
Copyright © April 2026 by Saburo Horikawa.
All rights reserved.